

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子

15-1

辰巳が弄する早回し動画のコマ送りまがいの事態が生じているにも関わらず、麻里子は心の動揺を隠しているのか、いともあっさりホテルの予約を引き受けてくれた。しかも目で微笑しながらだったので、まさか眼底に二つの月が浮かんでいることなど、わかろうはずもなかった辰巳は「ありがとうございます。よろしく頼みます」と礼を言うしかなかった。

予約を入れに出て行った麻里子の浮遊する夢のような薄寂しい風情を添える残像を追っていた辰巳は、なぜか、映画『雨月物語』の登場人物の源十郎を自身に、若狭を女杜氏に置き換えてしまっていた。

「これからすぐにでもチェックインできるそうです」と間もなく戻ってきた麻里子に言われたおかげもあって、辰巳は怪異な他界から現世に呼び戻された。

「明るいうちに、米焼酎の熟成部屋を見せてもらいたいのだが……」と辰巳は半覚醒状態から抜け出そうとして、居丈高な言い方をしていた。

「はい？……。あっ、はい。わかりました。ご案内いたします」としどろもどろで答えた麻里子は、それでもいよいよ本題に入ることにはすぐ思い当たった。

『W酒造』は、およそ3千坪の敷地に6棟の蔵が点在していて、現在ではその内の4棟が稼働している。

敷地内を麻里子と同行していた辰巳は、巨木の紅葉の下に停めてある紅く色づいた落ち葉がシグナルレッドの車体に降り積もっているベンツE320を目にして立ち止まった。

「楓かな？」と見上げながら尋ねた。

「フウの木です。カタカナ名です」と麻里子は言った。

「フウの木？初耳だね。それにしても見事な紅葉だ。……貴女の車ですか？」

「義姉の車です。義姉は今、体調を崩して入院しています」

「そうですか」と辰巳は言って、それ以上のことは訊かなかった。

4番蔵の西側に建っている石材を馬踏み目地で積み、重厚な外観の5番蔵の前まで来ると、女杜氏は白衣のポケットから鍵を取り出して入り口の重いドアを開けた。

中秋の微風に酒の香りが躍り出ると午後3時過ぎの明るさが蔵に差し込んで、中の一部分が眠りから覚めたかのような体を成した。

電気が点けられると、2列に計6本の柱を並べてある蔵の内部が現れた。

木骨石造の蔵の中の左右には減圧単式蒸留装置や貯蔵タンクが並んでいた。

「これから地下にご案内します」と言った麻里子は3本目の柱の辺りにある階段を、先にゆっくりと下りて行った。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-2

高さ3・5m、広さ140㎡余りの地下蔵の奥の方にある2段に区切られた棚に、225畧の木樽が30本ばかり収納されていた。

ある種の驚きを持って地下蔵全体を見渡していた辰巳に、「どうぞこちらへ」と麻里子は言う前から、樽の栓をひねって中身を注いだテイastingグラスを渡した。

「麹菌は？」と辰巳は香りと味を吟味してから訊ねた。

「黄麹です」と麻里子は言って、女杜氏の顔をふっと覗かせてみせた。

「寝かせてどれくらいなのかな」と辰巳はグラスを灯りにかざして酒の色を目視しながら訊ねた。

「兄が、いえ、社長が亡くなる1年位前に樽詰めしましたので、2年程になりますか」

「年季の入った木樽のようだが……」

「ええ、ここから北へ1時間ばかり行った所にある『Sワイナリー』から分けてもらった白ワインの空き樽です。そのワイナリーは斜面の自家畑でシャルドネを栽培しています」

「なるほどね。心血を注いだという訳だ」

「はい？」

「いやいや、いいんだ」と辰巳は言いはぐらかすのに、テイastingグラスを傾けて利き酒を続けた。

麻里子は肩透かしを食らったような気まずい思いを払拭するかのよう傍らの一升甕の蓋を取ってステンレス柄杓で中身をぐい呑みに注いで辰巳に渡して言った。

「これは真紀さんからお聞きになった杏仁のリキュールです」

「こいつに逢いたかったんです！」と声高に言って、麻里子に始めて見せた表情でぐい呑みを受け取った辰巳は、おもむろに中身を棚に置いてあった空のテイastingグラスに移し替えると、これまでも増して慎重に利き酒をする。

「これが1年で……？」と辰巳は目を光らせて一滴一滴を嚙み砕くようにして口走った。

「……ええ、1年位前です。この焼酎と種のままの杏仁と氷砂糖を素焼きの甕に入れておいただけです。梅酒を作るのとほとんど変わりません」と麻里子は努めて冷静に言ったけれど、相手の顔が、パッと変貌したことを見逃してはいなかった。

「近くにあんずの花で有名な観光地があるそうだね。名産品としてこれに似たような物があってもおかしくないと思うのだが？」と辰巳は言って、駄目を押した。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-3

麻里子はいくぶん緊張しながら相手の動静を見守っていたが、何か確信を得たかのように黙ったまま眼で微笑して頷いた。

「ないだね！」と辰巳は心をくすぐられる女の日線による癖に苦笑いを浮かべて、それでもなお念押しをした。

「あんずの里に昔から中堅クラスの食品会社はありますが、杏仁を材料にした商品は扱っていませんでした。種は捨ててしまうそうなので、正味20kgばかり取っておいてもらいました」

「何に使うのか探られなかったのかね？」

「そこの常務に頼んだのですが、当然ながら聞かれましたけれど、種の量も少なかったですし、彼とは青年会議所で同じ役員をやっていたこともあって、お茶を濁しても不審がられませんでした」

「ほお～、幸運としか言いようがないね。で、年間にしてどの位の量の種が見込められるかな？」と辰巳は前のめりに畳み掛けて訊いてくる。

「話が性急すぎませんか？」、信じられないという面持ちで麻里子は男を見つめた。

「分かった。話を変えよう。イタリアのリキュールでアマレットは知っているよね？」

「真紀さんの電話で今日知りましたので、早速ネットで調べておきました」

「そうだったのか！貴女がどんな考えで試みたのかは別として、偶然にもイタリアへの道に繋がったんだ。ストーリーは、そんなに構わないよね？」と辰巳は言って、片目をつぶって笑った。

「商品価値はあるのでしょうか？」と麻里子は訊ねてから、自分も性急すぎているのではないかと一顧していた。

「もちろん」と辰巳は言ってから、「テイスティングさせてもらって、憶測が確信に変わった」と言い切って、目を細めて女杜氏の顔を凝視した。

「まだ信じられませんが、希望の光が見えてきたような気がしています」と麻里子は思いの丈をぶつけるように言った。

「偶然の邂逅がもたらした産物だね。それにしても、これだけ好条件が揃うのは何かの運命を感じるな。また、お叱りを頂戴しそうだが、容器の素材やデザインや容量など早急に煮詰めるとして、製造ラインは我が社の工場を使えばいい。貴女にこの商品の名付け親になってもらいたいのだが、どうだろう？」

「私がですか？」

「そう、出資者からの熱い思いを分かってもらいたい」

「もうスタートしたのですね？」

「あらかた」と辰巳はきっぱりと言った。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-4

地下蔵で立ったまま時間を要していた辰巳と麻里子が表に出たのは、5時を少し回ったところで薄闇が迫っていた。

人影も途絶えた酒蔵の敷地内にフクロウの“ボボー、と鳴く声が断続的に続いた。

ついさっきまで辰巳と共有した5番蔵での二人きりの小一時間は、麻里子にとって相手との距離感を縮めたばかりでなく、ほのかな恋情を芽生えさせていた。

母屋に向かって麻里子と肩を並べて歩いていた辰巳は足を止めて咳ばらいをすると、夜陰にまぎれて言葉を発した。「初対面だけど愛しています」

辰巳に闇討ちまがいの告白を受けた麻里子は、「会ったばかりですが、私もあなたに恋したようです」と言って怯むことなくユーモアを交えて返した。

麻里子の運転するシビックハイブリッドは戸倉上山田温泉の老舗旅館『笹屋ホテル』の駐車場に停車した。

車から降り立った辰巳は、車中で麻里子から聞いて、イメージしていた通りのホテルの佇まいだと納得した。

辰巳は来る途中でコンビニエンスストアで買った下着を入れたビジネスバッグ一つを提げて、フロントで内容変更のチェックイン手続きを済ませた麻里子についていった。

本館から和風建築の回廊を渡り、ホテルの一角に別棟として建てられた数寄屋造りの8室の内の『桔梗』と名付けられた部屋に通された。

1932年に、旧帝国ホテルを手掛けた建築家・ライトに師事した遠藤新が設計した8室の総称を豊年虫（ほうねんむし）と呼称したのは、志賀直哉が逗留中に執筆した短編小説の『豊年蟲』（カゲロウの事）から由来する。

前室3畳と本間10畳の桔梗には、坪庭が望める源泉100%の石造りの広い内風呂が付いている。

ホテルの支配人も青年会議所のメンバーなので噂話になる心配はあるはずなのに、麻里子は平然としていた。

食事の前に風呂を勧めた麻里子は、辰巳が入浴中を見計らって、東京にいる真紀に今日1日起きた事を有り体に携帯電話で伝えた。

電話を切り、飲みかけのお茶を和テーブルに置いた麻里子は、未知へのドアを開けようとしている自分が自分でない感覚にとらわれていた。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-5

18時30分に頼んでおいた夕食が客室数48室の内の別棟にある豊年虫8室専用の厨房から配膳されてきた。

麻里子は事前にフロントに電話をして、宿泊メニューの会席料理(季節の献立10品)の3品目のお造り(四品盛り)を信州サーモン一品に9品目のお食事(栗おこわ)を手打ちそばに変えてもらっていた。

がっしりとした体形に豊年虫専用の浴衣を着た辰巳と和テーブルをはさんで相對したよそ行きのネイビー色で半袖スウェットワンピースを着た麻里子は雑念を払うかのようにビールの栓を抜いた。

「いいホテルを取ってくれてありがとう」と辰巳は言って微笑んでから、美味そうにビールを飲んだ。

「気に入っていただけると思っていました」

麻里子は美しい瞳を覗かせて低く笑った。

ビールを一本飲み終わったところで、デカンターに移し変えてもらっていた720mlの日本酒を常温で酌み交わした。

「弊社の蔵で仕込んだ純米大吟醸『月の花』です」と麻里子は自信ありげに言った。

「なかなかのものだね」

「なかなか、ですか？」

「いやいや、ベリーグッド、ベリーグッドです」と辰巳は微笑しつつ、口の中で同じ言葉を繰り返しつつぶやいてみせる。

「ご無理なさいませんように」と麻里子は言って、愉快そうに笑った。

「ところで、この魚はなんだろうか？」と辰巳は刺身を口にして訊いた。

「信州サーモンです。長野県の水産試験場が10年かけて開発した鱒類の養殖新品種で、5年ほど前に水産庁に承認されました」と答えた麻里子は、辰巳が興味を示してくれたことが嬉しかった。

「美味しい魚だ。地魚に地酒とは、乙なものだね」と辰巳は上機嫌で言って、再び信州サーモンを食べてから『月の花』を流し込んだ。

「信州サーモンは海には出ないんです」

「海に出なくたって、地魚で構いやしないじゃないか」と辰巳は、らしからぬ口ぶりで言った。

「そうですとも。わかっていますよ」と麻里子は笑って言い返した。

「あなたは何も知らなそうなふりしているくせに、男の喜ばせ方をわかっているね」

「あら、随分な言い方をなさいますこと」

私は瞳を蒼くしてもかまわない

どうして欲しいか話してちょうだい

そんなこんなで、口代わりの信州牛の陶板焼きや焼き物の鱸のオレンジ風味焼や煮物の豚の角煮酒粕がけ等を食しつつ、他愛もない話で盛り上がり、『月の花』も飲み尽くしそんな頃合いに、手打ちそばが供された。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-6

2人はデザートに塩黒豆ロールケーキを抹茶で味わった。

下膳の依頼電話をかけ終わった麻里子は、

「これからお風呂をいただきます」と面映ゆい表情を浮かべて言った。

「私はバーに行っているのです、ゆっくり入るといい」と辰巳は言って、気遣いを見せた。

基本的なことは同じ……時が過ぎても

そして恋人たちが愛し合えば、今でも

「愛している」という……

豊年虫8室の中で桔梗が一番、こじんまりしているが、部屋風呂のゆったりとした広さとガラス窓越しにライトアップされた坪庭の風情を味わうことができた。

石造りの浴槽に入りながら、麻里子はひとりになってしまうと、（ここはどこ？私はだれ？）と自然に自問していた。

気は張りつめていても、どこか夢遊状態にあった。

初めて会った男と5時間ばかりしか過ぎていないのに、今起こっている出来事が本当かどうかともわからなくなってきていた。

坪庭からコオロギの鳴き声が聞こえて、幻想かもしれないと思うと、そんな気もしたけれど、ディテールが明瞭すぎて、現実逃避は叶わなかった。

手早く髪と体を洗い終えた麻里子は、40半ばにしては若々しい肉体を湯船に沈めた。

髪を乾かし薄化粧をして風呂場を出ると、片付いたテーブルの先の部屋に並べて敷いてある布団が見えて、麻里子はドキッとした。

浴衣の上に半纏を羽織った辰巳は、カウンターバーにいる中年のバーテンダーに、この格好で飲んでいいかを訊いてから椅子に座って、カクテルのロブ・ロイをオン・ザ・ロックで注文した。

バー空間の佇まいやバーテンダーのステアさばきに、勝手にこのホテルの格付けをAランクに独り決めた辰巳は、カクテルをひと口飲んでほくそ笑むと、ロブ・ロイのカクテル言葉（あなたの心を奪いたい）を訊いてみたい衝動に駆られたが、思いとどまった。

「ところで、シャトー・ディケムは置いてあるかな」と辰巳はここに来た本来の目的をバーテンダーに期待を込めて訊いた。

「何とかなるかもしれませんが、少しお待ちいただけますか」とバーテンダーは即答して、電話で用向きを誰かに伝えてから、「近くにワインエキスパートの資格を持っている店主がやっている酒屋がありますので、コンシェルジュに訊いてもらっています」と蝶ネクタイを触りながら言った。

間もなくグレイヘアの女性がやって来て、

「ご所望のワインは仕入れ先の酒屋にございましたので、届けさせられますが……」と高価のせいで言いよんだ。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-7

浴衣姿の麻里子は桔梗の部屋の縁側の椅子に尻こそばゆいような気持ちで座っていた。

ケ・セラ・セラ
なるようになるわ
未来は誰にも分らないけど

上機嫌で部屋に戻ってきた辰巳は湯上りの麻里子を見て、あっ、と内心で驚くと、たちまちにして山東京伝(作) :歌川豊国(画) の黄表紙『賢愚湊銭湯新話』の中の一節(そもそも湯上りの時美しき女はまことの美人なり) を連想していた。

と言うのも、『H酒造』は昭和9年に『H美術館』を開館して、価値ある多数の古美術品を現在も収蔵しているので、辰巳が江戸文化に対しても造詣が深かったからだ。

辰巳は浮かれ気分で縁側にいる麻里子と対坐した。

「何かいいことでもあったのですか？」と麻里子は自分も嬉しくなって訊いた。

「そうなんだ！カウンターだけのバーだが、とても気に入った。バーを利用すれば、そのホテルの真価がわかるんだ。採算を取りにくいパブリック・スペースだからね」と辰巳は力説することで、麻里子の放つ艶っぽいオーラを覆い隠そうとした。

「ナイトキャップに、デザートワインをルームサービスしてもらうことにした。急にあなたと飲みたくなったワインがあってね。駄目元で頼んでみたんだが、拍子抜けするぐらいにゲットできたんだ」と辰巳は気持ちが伝わるように、精一杯の笑顔を作って言った。

「どんなワインか楽しみです」と麻里子は眼で微笑して言った。

辰巳はその時、眼で微笑する女の癖に心動かされる理由について、体全体で円形があるのは眼球だけだからかもしれないと、なぜか突飛な発想をしていた。

先ほどのバーテンダーがルームサービスをしてくれた。

バーテンダーはワインクーラーからワインボトルを取り出し、辰巳にラベルを見せて抜栓するとワイングラスに注ぎ、テイastingをしてもらった。

辰巳は退室するバーテンダーに礼を言い、チップを渡した。

シャトーディケム2001年を口にした麻里子は、眼を見開いて沈黙した。

「これをあなたと飲みたかったんだ」と辰巳はチェックメイトをかけるように言った。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-8

極上の貴腐ワインを半分ほど空けたところで、辰巳は麻里子を寝床へ誘った。

くちづけをするたびにヴァニラの香りが立ち上がった。

吸いつくような白い肌に手を優しく這わせると形の良い乳房や臀部がふるえて、貴腐ワインの残り香が微霧となって拡散する。

女は男が考えていたより数段美しかった。

男はクリトリスを指で弄びながら、首筋から耳朶にかけてくちづけして、乳首を軽く嘸んだ。女の息づかいが荒くなって喉が小さく震えだすと男は女的美脚を広げて中へ入っていた。

女の怜悧な眼に悲哀があった。

女は大学生当時に研究室の助手と関係を持ったが、相手の独善的なセックスがトラウマとなり、それから親しくなった幾人かの男に求められる状況になっても、セックスだけは頑なに拒絶してきた。

麻里子のヴァギナは濡れていたにもかかわらず痛がっているのがわかったので、ペニスを動かさないで、うりざね顔の臉やおちよぼ口とか髪とか首筋とかを口でソフトタッチしているうちに膣の中が温かくなってきた。

時の過ぎ行くままに この身をまかせ

男と女が ただよいながら

墮ちてゆくのも しあわせだよと

辰巳はゆっくりと霧の中に分け入るようにしてペニスを動かし始めた。

「大丈夫かい？」

「ええ、今まで感じたことのない感覚だわ」

「こう？」

「そうして、そうしてください」

「ほら、もっとかい？」

「あっ……」

麻里子は喘ぎながら、体を小刻みに痙攣させた。

麻里子は辰巳の腕の中で、初めて達したオルガズムのうら悲しい声をあげた。

「あなたが私の最初の男だったら……」と麻里子はいどみかかるように言って、遠慮を忘れた艶めきを揺らした。

「もし時間を組みかえることができたとしたら、ここでこうしてはいられなかつただろうね」と辰巳は笑って、白磁のように滑らかでしっとりとした女の臀部をぴしゃりぴしゃりと叩いた。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-9

まんじりともしないので男の寝息を聞いていた麻里子は、暗がりでも目を潤ませていた。

今までは“愛、とか“恋、とかいう言葉に困惑とおさまりの悪さがないまぜになって居たたまれない気持ちになってしまう麻里子だったが、辰巳のなせる業なのか、嫌悪感すら覚えていたこの言葉を胸底にストンと落とすことができた。

心的外傷や孤独をろ過しきった麻里子は下腹に騒めきを抱えながらも安らいでいた。

明日の国民の休日にセッティングされていた接待ゴルフをパスするわけにはいかなかった辰巳は麻里子に事情を話して、下膳に来た仲居に6時半の朝食を頼んでもらっていた。

東松山インターから約10分の所にある嵐山カントリークラブで10時スタートだったので、ホテルを7時半に出れば9時前には到着できる道程だった。

ふたりともゴルフの話題には触れないようにしていた。

忙しい朝の時間の流れの中で後朝の別れをしたほうが、むしろ後ろ髪をひかれずに済むと麻里子は思うことにした。

日の出時間の5時半を過ぎても眠りは訪れなかった麻里子は、部屋のあちこちにしみ込んだ夜の営みの名残りを黎明が消し去ってしまうのを待って、急いで朝湯に入った。

朝食をとりながら、新商品開発を具体化したいので、今度神戸に来るようにと辰巳は少し改まった口調で言った。

「心配なんかなくていい」と辰巳は麻里子の気持ちをくんだように言った。

「ありがとうございます」と女は言いつつ、男のあとが残る身体を引きずっていた。

「神戸に行ったことは？」

「京都から先はありません」

「それは良かった。案内しがいがあるね」と辰巳は言って、朝食後に麻里子がいれたお茶を美味そうに啜った。

「私の方から連絡することがあってもかまいませんか？」

「もちろんだとも。そうだ、携帯番号を交換しておかなければいけないね」と辰巳は口元を緩めて言った。

ホテルの正面玄関に黒塗りのトヨタセンチュリーが横付けされていた。

お抱え運転手が後部ドアを開けると、辰巳は当たり前のように入り込んだ。

J課長が運転する白のプリウスが迎えに来るものと決めつけていた麻里子は、改めて辰巳のすごさを痛感させられた。

複雑な面持ちを押し隠すつもりで傍らの支配人に世話になったことへの礼を言って、頭を下げた。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-10

辰巳の素性を明かさなかったせいで、その謎めいた雰囲気やバーでの言動に加えて黒塗りの高級車ともなると、要人の扱いに慣れている老舗ホテルのスタッフと言えども、さすがに好奇心をくすぐられた。

ホテルスタッフがプライバシーの配慮をわきまえていたとしても、当地ではメディアへの露出度も高い独り身で男の影すら無い女杜氏が豊年虫の桔梗でミステリアスな異性と一夜を共にしたとなれば噂が漏れることは必至だった。

20日の彼岸から23日の秋分の日迄の4連休とあって、『W酒蔵』も観光客の対応で忙しかった。

22日の午前8時過ぎにホテルから戻った麻里子は、内緒で持ち帰ったシャトー・ディケムのコルク栓を感慨深げに小物入れにしまうと白衣に着がえて足早に事務所へ行った。

事務員や蔵人と朝の挨拶を交わした麻里子は、どこかに後ろめたさを意識しながらも、会社の将来性に期待が生まれたことで、どことなく気持ちが華やいでいた。

「専務さん、何かいいことでもあったのですか？」と長年にわたり苦楽を共にしてきた女事務員はふたりきりになってから訊いた。

「そんな風に見えますか？」と麻里子は白衣の襟を左手で触りながら聞き返した。

「そんな風に？。そりゃあそうですよ」と女事務員は切り口上に不満顔で言った。

「強いて言うなら、風景がいつもとは多少違って見えるからかしら」と麻里子は彼女になら話のさわりだけでも伝えておきたい衝動に駆られたものの、打ち明けると希望が遠のいてしまいそうで、はぐらかして答えていた。

「そういうことにおきましよう」と女事務員は嫌味を言うとし事に戻っていった。

彼女を冷たくあしらってしまい悪かったなと後悔した麻里子は、後で食事にでも誘って埋め合わせをしようと思った。

社長室のデスク周りにあるファイルボックスから、兄の昌幸が記録したコメ焼酎にかかわる資料を抜き出した中にUSBメモリが入っていたので、LaVie L を立ち上げて接続すると詳細なデータと何枚かの写真が表示された。

画面を見ているうちに兄の面影がダブって麻里子は涙を滲ませた。

昌幸の会社再生プランは、死を予感していた病と女への熱烈な愛が要因で頓挫したけれど、その当事者である真紀の介在で巡り会えた麻里子と大手酒造メーカーの社長との突然燃え上がった愛の炎により、形態を変えて息を吹き返すことになった。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-11

4連休の初日に深夜まで辰巳と『ホテルオークラ』で過ごした真紀は、その日の夕方にかかってきた麻里子からの携帯電話で、これまでの大まかな経緯の報告を受けた。

自分の依頼事がとんとん拍子で進んでいることは申し分なかったが、ホテルの同じ部屋に泊まる現況まで、ありのままに告白されると、大人同士の分別とは言え、真紀は少なからず抵抗感を持った。

酸いも甘いも噛み分ける真紀の経験則からしても、辰巳と麻里子がいきなり男女関係を持つことなど意想外だった。

責任を強く感じた真紀は、明朝、始発の新幹線で長野まで行こうと焦ったりもしたが、ふたりからの連絡を待つほうが賢明だと思うことにした。

昼過ぎに辰巳から真紀に、今、嵐山カントリークラブでプレイをしているとの電話があった。

折り入って相談したいことがあるから、ホテルオークラで夕食でもどうかと言われた。

真紀にしてみれば願ってもない誘いだったので、嵐山カントリークラブは自分もコンペに参加したことがある話から、プレイしやすいコースでしようかと調子を合わせることで、相手の機嫌を損ねないように夕食は断って、8時にメンバーで会う約束をした。

約束の時間より早めにホテルの5階にあるオーキッドバーに行った真紀は、出迎えた黒服にその旨を伝えて奥のボックス席に案内してもらった。

真紀は程よい会話のささめきの中で、断続的に氷がグラスに当たる音やリズムカルに振られるシェーカーの音を耳にしながら辰巳を待っていた。

聞きたいことの要点を脳内で復誦していた真紀は、大柄な辰巳が間近にくるまで、ついぼんやりして気づかないでいた。

辰巳は立ち上がろうとした真紀を制して対座した。

「2日ぶりの再会だね！」と辰巳は（こんばんは）もなく照れ隠しに冗談を言って、自嘲めいた笑いを浮かべた。

「お疲れになったでしょう。今日はいくつで回られました？」と真紀は本題に入る糸口になればと思いやって訊いた。

「グロスで86。ドライバーはそこそこだけど、アイアンとパターに手こずったね」と辰巳はどこかよそよそしく答えた。

程よいタイミングで、ウェ이터がオーダーをとりにきた。

「スティンガーをお願いします」と真紀が頼むと、「何なのそれは？」と辰巳が訊き返えしてくるので、「ブランデーベースのカクテルです」と真紀は説明した。「ふーんそうなんだ。私はロブ・ロイをオンザロックで」と辰巳は意味深な含み笑いをして頼んだ。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-12

嵐山カントリークラブの話がひと区切りつこうとしたところで飲み物が運ばれてきた。「うん。信州のバーテンダーも侮れない」とロブ・ロイを飲んだ辰巳はうっかり呟いた。「昨夜の余韻を楽しんでいるようですね」とすぐに察した真紀はわざとらしく言った。「いやいや、まいったなあ」

「折り入って相談したいことがあるとおっしゃいましたが？」と真紀はカクテルグラスを持ったまま訊いた。

真紀には口ごもっている辰巳を見ているだけで、麻里子への本気度が伝わってきた。「スティンガーとやらを飲んでみたい」と辰巳は唐突に言って、ウェ이터を呼んだ。「ロブ・ロイをロックでお願いします」と遊び心をくすぐられた真紀は、辰巳の注文を聞き終えたウェ이터に頼んだ。

「同じカクテルをお作りして、それぞれを取り替えてお出しすればよろしいですね？」とウェ이터は両手を交差させてみせると注文を確認した。

「あなたはからかい上手だね」と辰巳はウェ이터が行ってしまうと半笑いで言った。「で、お話になりたいこととは？」と真紀はそれには反応しないで真顔に戻って訊いた。「……いくら考えても説明のしようがない何かで惹かれ合ってしまったんだ。こんな気持ちになったのはじめてだし、無責任だと取られてもしかたがないが、この先、どうなっていくかもわからない……」と辰巳は遠くを見つめる視線を真紀に向けて、心に思うままを口にした。

「昨日の夜に麻里子さんから電話がありました。辰巳さんがお風呂に入っている時です。当然ながら表情はうかがえませんが、いじらしいくらい、淡々と話されていました。自分の耳を疑うほどあからさまにです」

「そうだったのか……」と辰巳は言って、納得したように頷いた。

「その後は連絡もこないの、やきもきしていたら、辰巳さんからの電話でした」

「これから先、何があろうと彼女を大切にしようと思っている」

「あのポビーフィッシャー（チェスの天才）ですら、30歳年下のハンガリー人少女チェスプレイヤーへ熱烈で稚拙な恋文を書いているのですから。自信を持ってください」

「でも、結局のところ振られたんだ。わたしは天才じゃないから、無茶はしませんよ」

「好いた惚れたはお二人が決めるものです。ところで、お仕事の方の運び具合は順調のようですね」

辰巳の本音を聞くことができて一安心した真紀は、話を切り替えた。「うん。予想以上に手ごたえを感じている。今後は商品化までの段取りを緻密に計画してやらなければならない。必ず成功させるよ」

実業家本来の姿を取り戻した辰巳は、自信ありげに太い声で言った。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-13

「そこまでおっしゃると言うことは、キングのチェックが回避されたのですね！」と真紀は吉報が逃げないように、あえてチェス用語を使って婉曲的に尋ねた。

「サクリファイス無しで勝てそうだね。あなたはやるべき手は打った。心配しないでのんびりとゲームを観戦していればいい」と辰巳は満足の笑みを浮かべて言った。

「ありがたいお言葉ですが、そもそも事の発端は、相談を持ちかけた私に原因があるのですから、はいそうですかと言う訳にはまいりません」と真紀は瞬きをしてからロブ・ロイを飲んで肩をすぼめた。

「あなたがいなかったら、彼女と出会えなかった。それだけで充分だと思っている」と辰巳は言って、スティンガーに口をつけた。

「『H美術館』の事をお聞きしてもよろしいですか？」と真紀は少し前から思案していたことを切り出した。

「いきなりなんだね……」と辰巳は訝りながら訊いた。。

「言いにくい話ですが、絵を買っていただきたいのですが……」

「一体全体どういうことなのか、話の先が読めないじゃないか！」と辰巳は荒げた語気の声尻を何とかトーンダウンさせて言った。

「私の裸婦像を『H美術館』で購入していただきたいのです」と真紀は意図的に直球を投げた。

「……？……。あっ！」

「そうです。ご推察の通りです」

「噂には聞いていたが、どうしてまた？」

「どうあっても麻里子さんに協力したいからです。私にも一枚囁ませてください」と真紀はきっぱりと言った。

「……承知した。ここでクイーンサクリファイスの勝負手を指されたんでは仕方がない」

「それは裸婦像をご覧になってから、ご判断なさってください」と冷静に言葉を返した真紀だったが、唐突なお願いを呑んでくれた辰巳のリアクションに胸底で手を合わせていた。

「で、噂だと2点あるはずだが、それはどこに？」と辰巳は身を乗り出して尋ねた。

真紀がパークハイアットホテルでの横田の個展に裸婦像を展示することを画商の朝倉に了承したその日の夜に、何の因果か堀内が急死してしまった。

取り乱しながらも、事後対応をこなしていた真紀は、数日後に朝倉と会って、大切な人の死を悼む心情を真摯に話して、約束を反故にしたい気持ちを伝えた。

真紀は激しい抵抗を覚悟していたが、朝倉は拍子抜けするほど好意的に受けとめてくれた。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-14

「そんな顔をしないでください。私だって人情の機微に触れれば……ですよ」と朝倉は思わせぶりな態度で言った。

「ありがとうございます。ご迷惑をおかけしますが、よろしく願いいたします」と真紀は疲労感を滲ませながら言った。

「すでにニュース・リリースは配信してしまっているので、世間に知られることは承知しておいてください。横田には事の次第を私から話しておきます。今後、裸婦像に関する一切の取り扱いは私に委譲してください。契約書を作りますが、それでよろしいですね？」と朝倉は小鼻を膨らませて言った。

たった今の辰巳の問いかけに、真紀は裸婦像の認知度の高さを改めて実感した。

「2点とも品川区の天王洲アイルにある『美術品保管倉庫』に保管してあったのを、日曜祭日は出庫できないのですが、知り合いの画商に無理を言ってもらい、今日、銀座4丁目の画廊に運んであります。よろしければこれからご案内いたします」と真紀は腕時計を見ながら言った。

「休日のこんな時間にいいのかい？……そうかあ、なるほどね！あなたの好手に、まんまとやられたってわけだ。こうなったら、裸婦像を見ないことには収まりがつかない」と辰巳は目を輝かせて言った。

ホテルオークラからタクシーで10分もかからないうちにお目当ての画廊に着いた。

「お待ちしております」と朝倉は午後10時を少し回っていたが、待ちくたびれた素振りも見せないで丁寧な挨拶をした。

真紀が二人を紹介し終わると、朝倉は24㎡の床面積と3mの天井高のギャラリーの正面奥に97cm×190cmの裸婦像が2点並べて展示されている前に辰巳を案内した。

『着衣のママ』と『裸のママ』を交互に見比べていた辰巳は、しばらくして隣にいる真紀の息づかいを感じて我に返った。

真紀は何も言わず、その光景を予測していたかのような横顔を辰巳に見せていた。

辰巳は眼前の裸婦像にまつわる風聞を知っていたので、先ほど真紀に購入依頼をされた時は、『H美術館』の尊厳を傷つけられたような気がして、内心では身の程知らずで小賢しい女だと思いながらも、好奇心のほうが勝ってしまった。

こうして実際に2点の裸婦像を眺めていると、ベッドに横たわるモデルが互いに響き合い息づいて、辰巳は無意識のうちに永遠の女体美の神秘的な競演に誘引されていった。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-15

感動している辰巳に、ごく自然に近づいた朝倉は無言でコーヒーカップをソーサーごと手渡した。

目礼した辰巳は、経験したことのない喉の渴きをコーヒーで潤した。

「私の手には負えないので、『H美術館』の絵画彫刻室長に引き継ぐことにします」と辰巳は真紀と朝倉に向かって明言した。

「そうされた方が、後々、問題が起こらなくてよろしいと思います」と朝倉は心得顔で肯いてみせた。

「『H美術館』は来年開館70周年になるのを機に公益財団法人に移行するので、記念セレモニー用のコレクション作品のハイライトとして購入したいのだが……。私の一存では決められないのでね」と朝倉はもどかしそうに言った。

「この作品を高く評価してくださったのですか？」と真紀は顔を紅潮させて訊いた。

「嬉しい誤算だね。ここへ来るまでは、どこかに物見遊山の気分があった」と辰巳はしゃがれ声で言った。

「できれば、室長さんと早めにお会いしたいですね」と朝倉は言って、空になった辰巳のコーヒーカップを受け取った。

「できる限り早めに上京させます。話は変わりますが、これまでの当館の収集活動の特徴は朝鮮半島や中国大陸のアンティークに偏っているので、1000点を超えるコレクションの中でも身近に感じられるような収蔵作品は少ないのが実状です。芸術的な妖艶さのある作品は『H美術館』の起爆剤になるから、何としても欲しい。だって、日本酒と色気ある日本画の相性は良いに決まっています。ところで、日本画界で横田画伯をランク付けするとどの辺りになるのでしょうか？」と辰巳は商人としての顔を覗かせて訊いた。

「近い将来、画風は違いますが欲目なしで平山郁夫（同年12月2日逝去）クラスになるでしょう」と朝倉は答えた。

「それは凄い！そうなる前に手を打っておきたいね」と辰巳は真紀を見て、ふっと肩で吐息をついてみせてから朝倉に向かって、「そうだ、『ホテルオークラ神戸』のロビーに平山画伯の巨大な日本画が飾られているのをご存知かな？」と同調するかのようには訊いた。

「白砂青松を描いた大作ですね。画題は忘れましたが、漢詩から引用されたと聞いています」と朝倉は画商のプライドを保ちながらクールに答えた。

「そこまでご存知とは……。神戸市民の一人として嬉しい限りです」

「知っていてよかったですよ」と朝倉は苦笑まじりに言った。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-16

「忙しい2日間だったけれど、とても有意義で充実した時間を送ることができた。いやあ～、あなたの見事な手際には参った。たいしたもんだ」と辰巳は画廊の前でタクシーに乗り込む前、真紀に手を差し伸べて言った。

辰巳の乗ったタクシーが見えなくなるまで見送っていた真紀は、隣に立っている朝倉に深々と頭を下げた。「連休なのに無理を聞いて頂きありがとうございました。本当に助かりました。これでどうにか朝倉さんにも義理を果たせそうです」

「当方としても『H美術館』と取引できることになれば、信用や実績の面でプラスになります。こんなところで立ち話もなんですが、そうなった時の取り分は50%ということですのでよろしいですね」と朝倉はふいに言って、かすかに微笑んだ。

「よろしく願いいたします」と真紀は頷きながら言った。

連休明けのこともあって、『こはる』は開店の8時を1時間ほど過ぎると、予約の客で席の半分は埋まっていた。

真紀は大御所俳優のTが連れてきた映画プロデューサーの席についていた。

3年前に制作予定だった『人情紙風船』はクラクイン直前に中止となった。

スタッフや出演者たちもスケジュールを空けていたので、ペナルティーを含め取り沙汰されたが、真相は外部に漏れることなく立ち消えになった。

今のTは役者に専念することで失地回復を図るしかなかった。

Tが日韓合作映画に準主役として出演することになった経緯などを話していると、店のマネージャーが洗練された振る舞いで真紀に紙片を渡した。そこには長野から来た堀内と名乗る女性が真紀を訪ねてきているのがメモ書きされていた。

真紀は書かれている内容に目を疑ったが、さり気なく代わりのホステスを呼んでもらうと店の入り口に向かった。

頭で誰かは分かっていたけれど、別世界に紛れ込んだような表情を浮かべている麻里子を間近で見た真紀は、形容しがたい感情に揺れていた。

「夢じゃないでしょうね！」と真紀は麻里子の緊張を解すように手を握り締めて言った。

「気づいたら、ここに来ていました」と麻里子は訴えて、敏感になりすぎている自分を落ち着かせようとしていた。

「とにかく、中に入って」と真紀は促して、麻里子をカウンター席に座らせた。

「私の親友なの。お願いね」と真紀は女性バーテンダーに頼んでから、「ごめんなさい。お話は後で……」と麻里子に言いかけると、

「あの、私の車を下の花屋さんに駐車させてもらっているのですが……」

「え？ウソ。車で来たの？いい度胸してるわね。移動させるからキーを渡しておいてね」と真紀は感心した顔で言った。

「何かおつくりしますか？」と女性バーテンダーが訊いた。

ナビを頼りに高速道をひた走り、やっとのことで目的地に辿り着いたせいもあって、いま

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

だに興奮冷めやらぬ麻里子は、初めて見る女性バーテンダーの凛々しい姿に気を紛らわすことができた。

「アマレットを使ったカクテルはありませんか？」と麻里子は咄嗟に口をついて出た言葉に自分で自分に驚いていた。

「ウイスキーベースのゴッドファーザーかブランデーベースのフレンチコネクションはいかがですか？」

「フレンチコネクションにしてください」と真紀は嬉しさのあまり声高に頼んでいた。

銀座で深夜営業をしている中国料理店で四川料理を食べてから、真紀の借りているマンションの7階に戻ったのは、午前2時過ぎだった。

シャワーを浴びた麻里子は、真紀のパジャマを着て居間のソファに座り、首や肩を両手で揉み解していた。

「寝酒をやりましょう」と真紀は頭タオルのままで言って、デカンターとブランデーグラスを運んできた。

「お送りした杏仁酒は、まだありますか？」

「ええ、半分ほど残っているわ」

「覚えてたほやほやですが、フレンチコネクションにしませんか？」

「やるじゃない！麻里子さん！今宵の宴にはベストセレクションだわ」

それから二人は、氷を入れたブランデーグラスで乾杯した。

「私、夢を見ているのでしょうか？ここ数日間の出来事は現実離れしていて……」と麻里子は言いよどんでから、美しい瞳を潤ませて深呼吸をした。

「人生の流れが変わる時は、潮目を見誤らないことね。これだと確信したら、身をゆだねるしかないわ。偉そうに言うけれど、生涯にそういうチャンスは二、三度しかないし、それに気づかない人が大勢いるのよ！麻里子さんには、どうしても幸せになってほしいの」と真紀は語気を強めて言った。

「何かに突き動かされて、東京のご真ん中に来てしまいました。ひょっとしたら、何かによって、チャンスの神様？だとしたら、夜明かしで酔いつぶれたい……」と麻里子は本気で言った。

「よそう。また夢になるといけねえ」と真紀は堀内昌幸が好きだった古典落語『芝浜』の“夢オチ、を真似てから、唇の端を曲げて笑った。

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

※連載を終わって

HP連載小説をお読みいただきありがとうございました。

来春までには推敲して上梓する予定です。

その時はお知らせいたしますので、よろしくお願いいたします。

連載にあたり、お世話になった認定NPO法人エリアネットさん、ありがとうございました。

並木真人